
笑いの大学院

koumei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑いの大学院

【Nコード】

N4380G

【作者名】

koumei

【あらすじ】

笑いあり、推理ありの活字漫才。お笑いコンビの吉田と吉原が、毎回異なるテーマをもとに漫才を繰り広げます。

第一話・本当は怖い活字の世界

登場人物のプロフィール

吉田吉男
よしただよこお

男

A型

つつこみ

ボケ

吉原吉行
よしはらよしゆき

B型

年齢

性別

血液型

好きなもの

嫌いなもの

年齢

性別

血液型

?

男 ?

ボケ

好きなもの

嫌いなもの

つつこみ

吉田 「はいどーもー！ 皆さん、はじめまして！ 笑いの大学院のつつこみ役の吉田です！」

吉原 「皆さん、はじめまして。……呆けてしまった吉原です」

吉田 「呆けてどうすんだよ！ お前は、“ボケ”だろ！」

吉原 「このギャグは、活字でしか分からないだろ！」

吉田 「いきなりギャグから入らなくてもいいんだよ！……それより今日のテーマ、“本当は怖い活字の世界”って何？」

吉原 「うん、まあ、なんだ。……俺達活字の世界の住人にとつちやあ最近、“小説家になろう”っていうサイトが大問題になってるわけよ」

吉田 「べ、別に大問題にはなってねえだろ！ 変なこと言って、すいません！」

吉原 「そこで今日は、ひとつ間違つと大惨事になってしまつ活字の世界の恐ろしさを、皆さんに知ってもらおうと思つてな」

吉田 「活字の世界の恐ろしさ？」

吉原 「うむ。この漫才を読んじまつたら、怖くてメールも出来なくなるだろ」

吉田 「そんなわけねえだろ！」

吉原 「本当かどうか、早速、最初の例文を見てみよう」

健太君の家は、犬を三匹飼っています。

吉田 「別に……普通によく使う文じゃねえの」

吉原 「そう、この例文を読んだほとんどの人は、ケルベロスを飼っている平和な家庭を想像しただろう」

吉田 「誰もそんな想像はしねえよ！」

吉原 「しかし、だ!!……ズズウー」

吉田 「…何だよ、今のズズウーってのは？」

吉原 「よだね」

吉田 「汚えなあ」

吉原 「俺の興奮が読者に伝わると思ったんだよ！ 情景描写と心理描写が大事だって“小説評価”の所にもよく書いてあるだろ！」

吉田 「カギカッコばかりの小説でどうやって描写するんだよ！」

吉原 「じゃあ、俺がやってやるつか？」

吉田 「やってみるよ」

吉原 「天井からは七色のスポットライトが、俺を照らしている」

吉田 「ないよ」

吉原 「そして、目の前の客席では、五万人の観衆が腹を抱えて笑っていた」

吉田 「いねえよ」

吉原 「そしてなんと！ 隣には吉田がいた！！」

吉田 「最初からいるだろ！！」

吉原 「吉田は、なに言っただよ………と思った」

吉田 「もうやめろ！！」

吉原 「じゃあ次は、お前の外見を描写してやるよ」

吉田 「俺の外見？……な、なんか照れるな。」

吉原 「吉田には目が二つ、鼻が一つ、口が一つ、そして……
耳が二つあった!!」

吉田 「当たり前だろ!! 人間なんだから!」

吉原 「お前……人間だったの?」

吉田 「何だと思ってたんだよ」

吉原 「……エイリアンvsプレデター」

吉田 「意味分かんねえよ!」

吉原 「ゴメン……vsじゃなくてorだった」

吉田 「どうでもいいよ！ そんなことより、外見の描写ってというのは、髪型とか服装とかを描くんだよ！ 分かったか！」

吉原 「髪型か。分かった！ 吉田はショートカットのツンツン頭で…」

吉田 「そう、そう、そんな感じ」

吉原 「毛髪は九万八千三百二十六本あった」

吉田 「おい！」

吉原 「そして鼻毛は…」

吉田 「やめろ！！ 誰がそんな詳しいとこまで描写しろって言った！！！」

吉原 「……………あれ？ そういえば俺達、…………何の話をしてたんだっけ？」

吉田 「本当は怖い活字の世界”だろ！…………忘れんなよ！」

吉原 「そうだった、そうだった。…………で、どこまで話したっけ？」

吉田 「三十五行上の

まで！」

吉原 「思い出した。じゃあ早速、“切り取り”で“貼り付け”…………しかし、だ！…………ズズウー」

吉田 「……………俺の台詞せじひを勝手に切り取るんじゃないぞ！」

吉原 「悪かった、悪かった。そう怒るなよ」

吉田 「……………つたく！」

吉原 「えーっと……………まあ、つまりだな、上のほうに書いてある平和な例文だが、ある一文字を打ち間違えてしまつと恐ろしい事になるんだ。例文を忘れてしまった人は、マウスの上に付いてるローラーをこころごと回して確認してくれ。携帯の人は……………」

吉田 「そんなこと、いちいち説明しなくていいんだよ！ 早く見せるー！」

吉原 「ジャジャーン！」

健太君の家は、犬を三匹飼っています。

・ ・ ・
健太君の家は、犬を三匹喰っています。

吉原 「どうだ！ たった一文字、aとuを打ち間違えただけで、
平和な家庭が一転してホラーハウスになってしまったる！」

吉田 「別に、aとuを打ち間違えただけでこっちはならねえだろ、
普通」

吉原 「では、もう一つの例文を見てみよう」

京子さんは、レバニラ炒めを美味しくそうに食べている。

吉原 「もうこれだけで、京子さんが“きも肝い”ってことが十分伝わ

ると思うが…」

吉田 「別に、レバニラ炒めくらい食べてもいいだろ！」

吉原 「ある文字を間違えて打ち込んでしまうと、さらに酷くなってしまうんだ」

京子さんは、レバニラ炒めを美味しそうに食べている。

・
・
・
・

京子さんは、入歯ニラ炒めを美味しそうに食べている。

吉原 「どうだ！ “^{きも}肝い” から “変態” にレベルアップしただろ
！」

吉田 「入歯ニラ炒めってなんだよ！ それに、間違えて打ち込んで変換キーを押さなきゃこんな風にならないだろ！」

吉原 「変換ミスって、よくやってしまうだろ？　それで、和氣の解らない幹事が出てくるんだよな。いっつも！」

吉田 「わざとやってるだろ」

吉原 「んー。では次に、同じ読み方の文なのに、ひとつ間違うとまったく違う意味になってしまう例文をお見せしよう」

(遅いな、涼子は何をやっているんだろっ?)

吉原 「恋愛小説では定番の、彼女との待ち合わせのシーンだ！おそらく読者は、白いワンピースを着て金のブレスレットをしたシヨートカットの広○涼子みたいな可愛くて清楚せいそな彼女を想像しているだろっ……ゼエ……ゼエ……」

吉田 「そこまでは想像できねえよ」

吉原 「しかし！ 一つ間違つと、とんでもないことにナル！」

(遅いな、涼子は何をやっているんだろう?)

・ ・ ・ ・

(遅いな、涼子は何を殺っているんだろう?)

吉原 「どうだー！ “清楚な彼女”が一瞬にして“猟奇的な彼女”になってしまっただろ！」

吉田 「なんで“やる”が“殺る”になるんだよー！」

吉原 「あの野郎、……殺ってやるぜ！ ってよく使うだろ？」

吉田 「使っけど、“やる”を変換しても“殺る”にならねえだろ
うが!」

吉原 「そっか?」

吉田 「そっだよ!」

吉原 「まあいいや。次は最期の例文だ」

吉田 「“最後”だろ」

吉原 「皆さんは“っ”の文字を、誤って打ち忘れたことはないだ
ろっか? 俺はしょちゅっある」

吉田 「しょっちゅっ!」

吉原 「なにせ、同じキーを二回も打たねばならないからだ。次の例文は、二回打たなければならぬキーを一回しか打たなかった為起こる悲劇だ」

吉田、発進だ!!

吉田 「ちょっと待て!! なんか、いやーな予感がするんだけど」

吉原 「早速、見てみよう」

吉田 「わー! ちょっと待ってくれ!!」

吉田、発進だ!!

吉田は死んだ！！

・ ・ ・ ・

吉原 「このようにたった一つのミスで、俺達活字の世界の住人は、簡単に死んでしまうんだ。文章を書く時は、くれぐれも注意してくれ。……えっ？ 吉田はどうしたって？ 心配ご無用！」

吉田は復活した。

第二話・方言

吉田 「……………」

吉原 「おい！ 冒頭から・・・は読者に対して失礼だぞ！」

吉田 「……………なんで、お前がつっこんでんだよ」

吉原 「ひょっとして、まだ前回のこと、根に持っているのか？」

吉田 「当たり前だろ！ 一回殺されたんだぞ！！」

吉原 「よし！ じゃあ、“ソフィー〇世界”みたいに活字の世界から抜け出して、これを書いてる奴に文句を言いに行こうぜ！」

吉田 「そんなこと出来るわけねえだろ!！」

吉原 「そんなもん、やってみな分からへんて!！」

吉田 「な、なんだよ。……いきなり変な言葉使つなよ」

吉原 「俺さー、実は岐阜県出身なんやて」

吉田 「ふーん。そうだったのか」

吉原 「今日のお題は“方言”やでな。おみゃーさんも、今回は自分の出身地の方言で話さなあーいかんぞ」

吉田 「おみゃーさんって、……名古屋弁じゃなかったっけ?」

吉原 「そつたらちんちくりんなこと、いちいち気にしとつたらあかんぜよ!！」

吉田 「お前は、どこの出身なんだよ!」

吉原 「さあ、はよーおいと一緒に方言で話すのらー」

吉田 「だから、方言をこちゃまぜにして使うのはやめろ!」

吉原 「…お前、東京出身だろ?」

吉田 「ああ」

吉原 「だったら、東京弁でしゃべれよ」

吉田 「……東京弁って言われてもなあ…。俺はそんなの知らないし…」

吉原 「…可哀想に」

吉田 「別に、悲しいことじゃねえだろ!」

吉原 「俺がお前のために、東京弁を新しく作ってやるよ」

吉田 「やめろよ！」

吉原 「東京は色々な県の人が集まって来るから、標準語が主流になっちゃったんだ。だから東京弁は、どの県の人聞いても、理解できるものでなくてはならない」

吉田 「だったら、標準語のままでもいいじゃねえか」

吉原 「今の時代、個性が大事だ。例えば、こういうのはどうだろ
う…」

美和子さん、今夜……君に会いたいでちゅ。

吉田 「なんで赤ちゃん言葉になってんだよ!!」

吉原 「だめか？」

吉田 「これじゃあ、ただの変態だろ！」

吉原 「そうか。じゃあ次は、“大人”の方言を見せてあげよう……」

チヨウムペツケスムニダ。サランヘヨ!!……………アンニヨ
ンイガゼヨ……。

(初めまして。愛している!!……………さような

ら……)

吉田 「日本語じゃねえだろ!!……………しかも、思いっきり振ら

れてるし……」

吉原 「韓国弁には“スミダ”と“ムニダ”があります。」

吉田 「方言じゃねえよ!!」

吉原 「チョンマル？」（本当？）

吉田 「韓国語はもうやめろ!!」

吉原 「……そうだな。やっぱり、東京弁には古き良き日本語がふさわしいよな!」

吉田 「古き良き日本語？」

吉原 「そう。例えば、今、学級崩壊が問題になってるだろ」

吉田 「うん、確かにな」

吉原 「しかし、古き良き日本語を復活させれば……」

生徒一同 「先生、おはようござりまする!」（平伏）

先生 「うむ。皆、苦しゅうない、面おもてを上げよ」

生徒一同 「ははっ!」

先生 「では早速、昨日皆に命じておいた宿題を…」

生徒A 「そ、それがし、一生の不覚にござりまする!」（平伏）

先生 「貴様、………忘れたと申すか!」

生徒A 「お、お許しを!」

先生 「ならぬ!… この不届き者め!… わしが成敗して晒さらし首

にしてやる!!」

生徒A 「む、無念!!」

吉田 「ちよーっと待て!!」

吉原 「なんだよ! これから四十七人の生徒達が先生宅に討ち入りを果たす面白いところなのに……」

吉田 「面白くもなんともねえよ!! それに、この学級もすでに崩壊してるだろ!!」

吉原 「何を言う! これは生徒達が力を合わせて先生を討ち取る感動の学園ドラマだぞ!」

吉田 「……………」

吉原 「どうした？ 感動して言葉も出なくなったのか？」

吉田 「つつこみ所が多すぎて、途方に暮れていたんだよ！！」

吉原 「ちなみに、今年は、メールの語尾に”候”を付けるのが流行になるらしいぞ」

吉田 「そんなわけねえだろ！！」

?? 「今日からは私のことを、エンジェル、オブ、ミュージックと呼んでくれたまえ！」

吉田 「……エンジェル、オブ、ミュージック？」

?? 「ザ、ファントム、オブ、ジ、オペラと呼んでも構わないぞ！」

吉田 「……お前、“マスター吉原”は、もういいのかよ？」

?? 「……若きパダ・ワン吉田よ！ ジェダイマスターの称号は、そなたに与えよう。くれぐれも、ダークサイドに堕ちてはならぬぞ！」

吉田 「……お前はもう、堕ちてるけどな」

?? 「くだらんつっこみをする奴には、シャンデリアをお見舞いしてやる!」

吉田 「お前こそ、くだらねえことばっか言ってるねえで、早くその仮面を取れ!」

?? 「やだ!」

吉田 「じゃあ、お前はずっと“??”でいいんだな?」

吉原 「……………ちえ!せっかく今日の為に買ってきたのに!」

吉田 「どつでもいいけどよ……………その仮面はジェインンの!」

吉原 「しー!! 黙ってれば分からないって!」

吉田 「いい加減な奴」

吉原 「……ところで、お前は、オペラ座の怪人を観たことがあるか？」

吉田 「ああ、映画なら観たことがあるよ。怪人の登場するシーンの音楽が、すごくかっこいいんだよな！」

ジャーン！！！！ ジャジャジャジャーン！！！！

吉田 「だから……ボリュームをMAXにして流すのはやめろー！！」

吉原 「今日はオペラ座の怪人の素晴らしさについて、ミュージカルを257回、映画を55回観た俺が、とくと教えてやろう」

吉田 「嘘つけ！」

吉原 「まずは登場人物だ。クリスティーンとラウル、そして怪人が主な登場人物んだけど、やっぱり、この中では断然怪人がかっこいいよな！」

吉田 「まあ、一応主役だからな」

吉原 「クリスティーンを誘惑するシーンなんか、俺も思わず蕩けちゃったもん」

吉田 「気持ち悪いこと言つなよー！」

吉原 「そして悪役のラウル。こいつがまた、忌々しい若造だな」

吉田 「おいおいー！」

吉原 「二人が結ばれそうになると、いつつも邪魔をするんだよ！」

吉田 「……お前の見方は、少しおかしいぞ」

吉原 「なんで？ 主人公とヒロインが結ばれるのが普通だろ？」

吉田 「怪人の方が悪役なんだよ！」

吉原 「そうだったのか！」

吉田 「お前……ほんとに観たことあるのかよ？」

吉原 「ちょ、ちょっと、ど忘れしてしまったただけだ。ラストシーンはちゃんと憶えているぞ！」

吉田 「言ってみろよ」

吉原 「クリステインと怪人は地下で二人仲良く暮らしましたとさ。めでたし、めでたし」

吉田 「全然違うじゃねえか！！」

吉原 「ところで……話は変わるが、今、この怪人について、一つの噂が囁かれているのを知ってるか？」

吉田 「どんな？」

吉原 「小説から始まり、ミュージカル、映画と来たら次は……
…決まっているだろ」（ニヤリ）

吉田 「…なんだよ」

吉原 「プロレスのマスクラ・コントラ・マスクラ（覆面剥ぎデスマッチ）だよ！」

吉田 「ありえねえだろ！」

吉原 「怪人の必殺技は“天使の歌声”だぞ！」

吉田 「どこが必殺技なんだよ！！くだらない話はもうやめろ！」

吉原 「わかったよ。じゃあ、最後に一つだけ宣伝させてくれよ」

吉田 「……………何の？」

吉原 「今度、オペラ座の怪人を現代風アレンジした小説を自費出版するつもりなんだ！」

吉田 「現代風にアレンジ？……………どんな話なんだよ？」

吉原 「ストーカー男が、好きな女性の彼氏を人質にして、『俺を好きになってくれないと、こいつを殺すぞ！』って告白する感動のラブストーリー」

吉田 「犯罪じゃねえか！」

吉原 「タイトルは、『オペラ座の廃人』だ。みんなぜひ買ってくれ！」

吉田 「絶対、売れねえよ！」

第四話・Gの悲劇

吉田 「Gの悲劇……か。なんか、また今回もパクリっぽいテーマだな」

吉原 「いいだろ、別に。題名からして、すでにパクリなんだから」

吉田 「……完璧に開き直ってるな。……まあいいや。それで、今回はどうい話なんだ？」

吉原 「昨シーズンの巨人は、本当にかわいそうだったよな。日本一まであと一勝というところまで行ったのに……」

吉田 「Gの悲劇、……ジャイアンツの悲劇。……やめろよ、そんなの」

吉原 「冗談、冗談。今回は本格推理モードだ！」

吉田 「本格推理？……うん。それは面白そうだな！ 実は俺も、エラリー・クイーンの大ファンなんだよ！」

吉原 「今日は私、名探偵ドルリイ・レーンが解決した“ある事件”を話そうと思っている。それを聞いて、ぜひ犯人を言い当ててくれたまえワトソン君」

吉田 「ありえねえコンビだけど……まあいいや。早く聞かせるよ」

吉原 「……そう、これは昔、俺が友人のAさん、Bさん、Cさん、Dさんと一緒に、俺の家の二階で飲み会をしていたときに起きた悲劇だ」

吉田 「なんか、……適当な名前だな……」

吉原 「いちいち名前を考えるのは、めんどくさいだろ……！」

吉田 「まあ……………いいや。それで何が起こったんだよ！」

吉原 「一階に居た俺の友達の吉崎さんが、何者かに殺されたんだ」

吉田 「殺人事件か！」

吉原 「吉崎さんの死因は撲殺で……………第一発見者のDさんの悲鳴を聞いて俺たちが駆けつけた時、すでに吉崎さんは虫の息だった……」

吉田 「かわいそうに……」

吉原 「すぐに救急車を呼んだんだが……………吉崎さんはまもなく息を引き取った……」

吉田 「そうか、……………つまり、Aさん、Bさん、Cさん、Dさんの中の誰かが犯人なんだな！」

吉原 「そうだ。途中でAさん、Bさん、Cさん、Dさんの順に一階にあるトイレに行っている。おそらく、その時に四人の中の誰かが…」

吉田 「うーむ。じゃあまず、事件現場の状況を教えてくれ」

吉原 「そうだな、事件現場でまず真っ先に目に付くのは、バナナの皮だ」

吉田 「バナナの……皮？」

吉原 「そうだ。……しかも、……誰かが滑った跡まである！」

吉田 「……ま、まさか！ 吉崎さんがバナナの皮で滑って、頭を打って死んだ……」

吉原 「……………」

吉田 「とか、ふざけたことをぬかすんじゃないやねえだろうな!！」

吉原 「ギク!」

吉田 「そんなオチだったら許さねえぞ!！」

吉原 「も、もちろん違っても!」

吉田 「……………じゃあ他に何があったのか、続きを教えてください」

吉原 「……………うむ。……………えーっと……………確か……………そうそう、殺害現場に人を殺せるような凶器は落ちてなかったんだ。落ちていたのはバナナの皮に、弾が入っていないモデルガン、たわし、スリッパの片方、洗濯バサミにハンガー、リカちゃん人形、そして……………ラムちゃん愛用の10tハンマー!」

吉田 「最後のは十分凶器になるぞ……………」

吉原 「…とまあ、これだけなのだが。実はこの中のどれかが、吉崎さんを殺す凶器になったんだ」

吉田 「うーん、……じゃあ次に、事件が起きた時の二階の様子を教えてくださいよ」

吉原 「わかった。まず最初にトイレに行ったのはAさんだ。確かその時、下の階で、パン！ という大きな音がしたな…」

吉田 「まさか！……銃声？」

吉原 「さあ、……どうだろう」

吉田 「むむむ、……怪しいな、その音」

吉原 「次のBさんがトイレに行った時は、おかしい音はしなかった」

吉田 「決まりだ。犯人はAさんだよきつと！」

吉原 「まあ、そう焦るなよ。Cさんがトイレに行った時は、下の階でドスン！ という大きな音がしたぞ」

吉田 「吉崎さんが倒れた時の音か！？……………だとすると犯人はCさん？……………」

吉原 「最後にDさんが、一階のトイレに行く途中で吉崎さんを発見したんだ」

吉田 「……………つまり吉崎さんが倒れていたのは、一階のトイレに行く途中。人の目に付く所だったんだな？」

吉原 「そうだな。ちらりと視界の片隅に入る程度に」

吉田 「うーん、……………視界の片隅でも、人が倒れていたら普通は気が付くよな」

吉原 「……………」

吉田 「じゃあ最後に、Dさんが吉崎さんを発見した時の状況を教えてくれよ」

吉原 「わかった。……あの時、階段を下りているDさんの足音が突然止まって、『うわあ!』というDさんの悲鳴が聞こえたんだ。そして俺たちが駆けつけた時には……グス……あの丈夫が取り柄の吉崎さんが……」

吉田 「そうか、……でもまてよ! じゃあ、Dさんは一階には下りていないんだな?」

吉原 「そうだ。俺たちが駆けつけた時、Dさんは階段の途中に居た」

吉田 「……何かを投げつけるか、それとも何かの遠隔装置でも無い限り、Dさんは吉崎さんを殺害することはできないってことか……」

吉原 「さあ、俺の話はここまでだ。……犯人が分かったかな?」

吉田 「……………分かった！ 分かったぞ！！」

吉原 「嘘、……………ほんとに？」

吉田 「ああ！！ ずばり犯人はCさんだ！！ なぜなら……………AさんかBさんが吉崎さんを殺したとしたら、必ず次にトイレに行った人が、倒れている吉崎さんに気がつくはずだ！ それに、Dさんには吉崎さんを殺す機会が無かった！……………つまり犯人はCさん以外、ありえない！！」

吉原 「ふーん、……………じゃあ凶器はなんだったんだ？」

吉田 「ふふふふ。ずばり凶器は……………リカちゃん人形だ！！」

吉原 「リカちゃん人形……」

吉田 「そう、“ブロンズ製”のね！！ これなら十分、人を撲殺することができるだろ！！」

吉原 「うーん、……………発想は面白いが、……………残念ながらハズレ
ー！ 人を殺せるような凶器は無かった、と言っただろ！ リカ
やん人形は、俺が着せ替えをして楽しんでる普通なものだ」

吉田 「気持ち悪いことするなー！」

吉原 「さあ、ここでお決まりの読者への挑戦状だ。犯人、凶器、
そしてこの話に隠された“秘密”をずばり当ててくれ！ ヒントは
“G K B ”の悲劇だ！」

第五話：Gの悲劇 解決編

吉田 「むむむむ、……分かんないな。いったい誰が、どうやって吉崎さんを殺したんだ？」

吉原 「ふっふっふ。それでは、今から始まる解決編で全ての謎を解き明かしていこう」

吉田 「くそー、……くやしい！」

吉原 「まずは、凶器だ。バナナの皮に、弾が入っていないモデルガン、たわし、スリッパの片方、洗濯バサミにハンガー、リカちゃん人形、そして10tハンマー。この中で凶器になりそうなものは何か……分かるかな？」

吉田 「凶器、……うーん。やっぱり10tハンマー……かな？」

吉原 「チツチツチ。重量挙げの選手でも四百キロを持ち上げるのが限界なんだぞ。どうやって10tもあるハンマーを人間が持ち上げるんだよ」

吉田 「いきなり論理的な説明するな！ だいたい、そんなものが家の中に転がっていること自体、おかしいだろ！ どうやって家中に持ち運んだんだよ！」

吉原 「吉田よ、………籠かごの中の鳥は鑑賞かんしょうされる道具でしかない、と憶えておくといい」

吉田 「意味不明なこと言って誤魔化ごまかすんじゃねえ！」

吉原 「今の台詞、………かつこよかつただろ」

吉田 「アニメの台詞をパクっただけじゃねえか！………それより凶器はなんだよ！」

吉原 「ふっふっふ。今回の事件の凶器はずばり！………」

……」

吉田 「早く言えよ！」

吉原 「スリッパの片方だ！」

吉田 「……スリッパ？」

吉原 「そう、スリッパ」

吉田 「……そんな物でどうやって人を撲殺するんだよ？」

吉原 「人？……いつ、だれが、吉崎さんは人間だ、なんて言った？」

吉田 「な、何！？」

吉原 「そう、……実は、吉崎さんは“GOKIBURI”だったんだ」

吉田 「ゴ、ゴキ……」

吉原 「ブリっ子」

吉田 「な、何でそんなものに名前が付いてんだよ!!」

吉崎 「俺の友達だから」

吉田 (・O・)

吉原 「もう分かったろ。パン！ という音は、Aさんが凶器のスリッパを振り下ろしたときの音。つまり、犯人はAさんだ！」

吉田 「じゃあ、あのCさんが1階に行った時に聞こえた、ドスンと言っ音は……」

吉原 「あれは、Cさんがバナナの皮で滑って転んだ音だ」

吉田 「……………」

吉原 「これで、BさんとCさんが倒れている吉崎さんに気がつか
なかつた訳も分かつただろ。二人はただ、“吉崎さんの体が小さか
つたから気が付かなかつた”だけなんだ」

吉田 「じゃあお前は……………瀕死のゴキブリを見て本当に救急車
を呼んだのか」 (ギロリ)

吉原 「吉崎さんは同じ家に住んでる大切な友達だ。当然だろ」

吉田 「ふざけるなー!! おれはこんなの認めねえぞー!!」

第六話：Gの悲劇2

吉田 「Gの悲劇の続編か。……また、ゴキブリが出てくる話じゃねえだらうな？」

吉原 「……語っても、よろしいですか？」

吉田 「なんだよ、いきなり」

吉原 「あれはちょうど、二年前の夏の出来事でしたわ……」

吉田 「ちょっと待てー!!」

吉原 「何ですか？」

吉田 「話の前に一つだけ確認しておきたい。………今回登場するのは、全員人間だらうな？」

吉原 「……………もちろん、そうですね」

吉田 「よし、じゃあ聞いじ」

吉原 「その日突然、吉原探偵事務所に一人の男が駆け込んで来たんですわ」

吉田 「いつから探偵になったんだよ」

吉原 「……………いい加減、わたくしがモノマネをやっている事にもつつこんでもらえませんかでしょうか？」

吉田 「知らねえよ！ 誰のモノマネだよ！」

吉原 「FF10に登場する爺さん」

吉田 「……………はいはい。分かったから、続き」

吉原 「……………その男はひどく慌てた様子で捲くし立てたんだ。『うちの猫が殺された！ 金はいくらでも払うから、絶対に犯人を見つけてくれ！』ってね」

吉田 「なんだよ、……………今回も殺人事件じゃないのか？」

吉原 「そうだが、……………何か文句あるのか？」

吉田 「……………別にいいけどよ。やっぱり、推理ものには殺人事件がないと、今ひとつ盛り上がり欠けるようない……………」

吉原 「ふっふっふっふっふ。……………君は、そんなに殺人事件がお望みなのかね？」

吉田 「な、なんだよ、……………いきなりハンマーなんか持ち出して……………」

吉原 「なんなら、今から話を“Yの悲劇”に変更してもいいんだが……………」

吉田 「……………」

吉原 「どっちがいい……………」

吉田 「……………やっぱり、Gの悲劇のほうがいい……………」

吉原 「そうか、じゃあ話を続けよう。今回の事件を解決するには推理力も必要になるから、重要な手掛かりを見逃さないように注意しろよ！」

吉田 「推理力“も”ってのはどういう意味だ？」

吉原 （一―一）

吉田 「なんか怪しいな……」

吉原 「ま、まあ、とりあえず最後まで聞け」

吉田 「……分かったよ」

吉原 「男は吉森源治よしもとげんじという名の大富豪おごでな。その日、彼の家には、妻の喜代子きよこさんと六歳になる息子の明君あききみ、住み込みで働いている執事と料理人、さらに、明君の家庭教師とメイドの女性が二人の全部で八人の人間が居たそうだ」

吉田 「その中の誰かが、猫を殺した犯人ってわけか。………と
ころで、死因は何だったんだ？」

吉原 「うむ。死因は窒息死で、源治さんの話では、死体は家の者に見せつけるかのように、リビングの階段のところにロープで吊るされていたそうだ」

吉田 「……第一発見者は？」

吉原 「二人のメイドだ」

吉田 「二人は一緒にいて、ほぼ同時に見つけたのか？」

吉原 「そうだ」

吉田 「ふーん。……じゃあ次に、事件の起こった時刻とそれぞれのアリバイを教えてくださいよ」

吉原 「その前に、一つ気づいたんだが……」

吉田 「何を？」

吉原 「今回の話、……ボケるところがほとんど無い！ どうしよっ……」

吉田 「無理にボケなくてもいいんだよ!!」

吉原 「ほんと？……じゃあ今回は、ボケ無しでいくぞ？」

吉田 「そうしてくれ……」

吉原 「……事件が起きた時刻だが、源治さんは、事件が起きたのは午後四時から午後五時の間だと言っていた」

吉田 「何か根拠はあるのか？」

吉原 「うん。四時頃にはまだ、リビングに死体は吊るされてなかったと複数の人が証言しているし、死んでいる猫が発見されたのが午後五時だから、猫が死んだのは午後四時から午後五時の間で間違いない！……と、源治さんは自信を持って言っていた」

吉田 「じゃあ、その午後四時から午後五時までのみんなのアリバイは？」

吉原 「それが、……その時間、一人で遊んでいた明君を除いて全員に、ほぼ鉄壁のアリバイがあったらしい」

吉田 「なんだって!？」

吉原 「唯一、源治さんが二階にある自分の部屋のトイレに入っていた二、三分の間、同じ部屋に居た妻の喜代子さんが一人だったのを除けばね」

吉田 「その部屋からリビングまでは、どのくらいで行けるんだ？」

吉原 「走って三十秒ってところかな」

吉田 「うーん、……リビングに行って戻って来るだけで精一杯か。……他に何か情報はないか？」

吉原 「ふふふふふ、……ある。その後、俺が屋敷で調査をすると、色々興味深い情報入手することに成功したんだ」

吉田 「どんな？」

吉原 「まずは、二人の可愛いメイドを尾行していたときに、二人のひそひそ話を盗み聞きして得た情報だ」

吉田 「それは、尾行じゃなくてストーカー行為だろ！」

吉原 「だってメイド姿に萌えたんだもん」

吉田 「お前は、……ひとの家まで行って何してんだよ！！」

吉原 「まあ、そう怒るなよ。おかげで、面白い情報が手に入ったんだから」

吉田 「……ほんとかよ？」

吉原 「メイド達の噂話では、どうやら、喜代子さんと執事の男とは不倫関係にあったらしいんだ」

吉田 「何だって！……それは、……確かに、今回の事件の動機と何か関係ありそうな話だな」

吉原 「さらに、喜代子さんは……………家庭教師の男とも不倫関係にあったらしい」

吉田 「どういう人なんだよ!!」

吉原 「メイド達の話では、喜代子さんは若い男を見ると見境なしに誘惑しているそうだ」

吉田 「……………ほんとに信用できる情報なんだろうな？」

吉原 「ああ、確かだ。……………残念なことにその後は、チヨーむかつくー! とか、マジでありえなくなーい!? という言葉が飛び交うだけで、それ以上の詳しい情報は聞けなかったが…」

吉田 「……………そのメイド達も十分怪しいな」

吉原 「続いて俺が出会ったのは、源治さんの息子の明君だった。事件について何か知ってることはないかと俺が尋ねると、明君は泣きながら、…G…G…Gが…という謎の言葉を呟いたんだ」

吉田 「G!?!?……………Gの悲劇、……………ということは、殺された猫と何か関係あるのか…」

吉原 「俺もこの“G”という言葉の意味が分かったのは、ずっと後になってからだった」

吉田 「ふーむ、……………これで全部の情報が出揃ったのか？」

吉原 「そうだ、お前はこの事件の謎が解けたか？」

吉田 「うーん。今のところ考えられる可能性は二つだが、……………どちらも、謎がいつぱい残ってしまうんだよな」

吉原 「念のために言っておくが、外部犯や共犯はありえないからな」

吉田 「そうか、……………それなら、残る可能性は一つだが……」

吉原 「聞かせてもらおう」

吉田 「俺の考えでは、……………猫を殺した犯人は、妻の喜代子さんだと想い」

吉原 「ふーん、……………で、どうやって？」

吉田 「あらかじめ殺害しておいた猫にロープを結び付けておいて、どこかに隠しておいたんだ。そして、源治さんがトイレに入った隙にリビングまで走って、すぐにロープを階段に結びつけると、猫の死体を階段から投げ落とした……………うーん、ちょっと無理があるかな？」

吉原 「お見事!!」

吉田 「え?……………もしかして、当たっちゃった？」

吉原 「完璧なハズレ」

吉田 「……………馬鹿にしゃがって」

吉原 「さあ、ここで再び読者への挑戦状だ！ ずばりこの事件の真相を説明してほしい！ 最大のヒントは明君の言っていた“G”という言葉だ。……………くれぐれも吉田みたいに、“推理すべき所”を間違えないように」

第六話・Gの悲劇2（後書き）

Gという言葉の意味は、文中を探せば見つけれられます。ひっかけ問題ですが、柔軟な発想で考えれば真相までたどり着けると思っているので、ぜひチャレンジしてみてください。

第七話・Gの悲劇2 解決編

吉田 「うーん、……あれから少し考えたんだけどよ……」

吉原 「うむ」

吉田 「この事件は、誰かが悪意を持って猫を殺したんじゃないかな？」

吉原 「ギク！」

吉田 「事故だったんじゃないかな？」

吉原 「…ホッ」

吉田 「なんだよ、…今の反応は？」

吉原 「いや、なんでもない。……それよりお前の推理を聞かせてもらおうか」

吉田 「いや、推理と呼ぶほどのものでもないんだけど……実はこの事件は、猫と遊んでいた明君が、何らかの原因で誤って猫を死なせてしまったんじゃないかなって」

吉原 「その根拠は何かあるのか？」

吉田 「根拠は無いんだけど、……アリバイが無いのは明君だけだし、一人で遊んでいたというのも気になるんだよな。実は“一人で猫と”遊んでいたんじゃないかなって思ってる」

吉原 「ふーん、……まあ、前回の答えよりは半歩前進といったところだな」

吉田 「ぐ、……くそー」

吉原 「それでは、今から全ての謎を解き明かしていこう」

吉田 「くやしー」

吉原 「さて、まずは死んだ“猫田”さんについてだが…」

吉田 「ちょっと待て!!……誰だよそれ!!」

吉原 「……………階段からロープで吊り下げられて死んでいた“人”だよ」

吉田 「おま……死んだのは“猫”だって言ってたじゃねえか!!」

吉原 「俺はそんなこと一言も言ってないもーん。源治さんが猫田さんのことを“猫”と呼んでいたただけだもーん」

吉田 「もーん、……じゃねえよ!! そんなの卑怯だろうが!!」

吉原 「卑怯?……何言っただよ! お前が、“今回登場するのは全員人間だろうな?”と言ったとき、俺は“そうだ”と答えただろ」

吉田 「ぐむむむ……」

吉原 「それに、もう一つ重要なことを俺に訊いていたな……憶え

ているか？」

吉田 「……………さ、殺人事件のことか？」

吉原 「そう。お前が、“なんだよ…今回も殺人事件じゃないのか？”と言ったときも、俺は“そうだ”と答えた。すなわち、死んだ人間がロープで吊り下げられていて殺人事件じゃないとなると……………残る可能性は一つだよな」

吉田 「……………首吊り自殺」

吉原 「その通り。……………源治さんは猫田さんが死んでいるのを見て、これは殺人事件だと勝手に思い込んでしまったんだろうな。敵が多そうな感じの人だったから」

吉田 「じゃあ……………お前は どうして自殺だと分かったんだよ！」

吉原 「猫田さんのポケットから遺書が出てきたから」

吉田 「なんだそりゃ。……………くだらねえ」

吉原 「くだらない？……………ふふん、そこまで言うのなら、この事件

の真相をズバリ当ててみるよ」

吉田 「真相？……………だから“源治さんから猫と呼ばれていた人間が自殺した”……………だろ？」

吉原 「ふっふっふっふ。……………五十点」

吉田 「どうしてだよ？」

吉原 「あの日、吉森さん宅に居た八人の中で誰が自殺したのか、……………その謎を解く手がかりもすでに提示してある」

吉田 「八人の中の誰か？」

吉原 「そうだ。分かるかな？」

吉田 「……………うーん。……………まず源治さんと妻の喜代子さんは違うだろ。……………それにお前が屋敷で出会ったメイドと明君も違う。……………となると残るは、執事と料理人、それに明君の家庭教師か……………」

吉原 「うむ。そしてここで思い出してほしいのが、明君が泣きな

がら言っていた“G”という言葉だ。実はこの“G”というのは、俺が“ある言葉”を聞き間違えたもので、本当は別の意味があったんだ」

吉田 「G?.....別の意味?.....あ、そうか!.....“爺”か!」

吉原 「そう。.....“G”の本当の意味は“爺”.....つまり、明君が自殺した猫田さんの事を、そう呼んでいたということは、.....
...もつ分かっただろ?」

吉田 「ああ。自殺したのは執事の男だな」

吉原 「.....」

吉田 「なんだよ、.....違うのか? 爺といえば普通、執事だろ」

吉原 「執事と家庭教師は“若い男”だと言っただろ」

吉田 「あつ、そっか。ってことは.....」

吉原 「そう。……つまり今回の事件は、年寄りの“料理人が首吊り自殺をした”が、本当の正解だ。……これぞまさに、“爺の悲劇”！」

吉田 「そういつオチかよ」

第八話：本当は怖い活字の世界2

吉田 「えーと、今日のテーマは……本当は怖い活字の世界2か。
……何でまた本当は怖い活字の世界をやるんだ？」

吉原 「うむ、実は最近また、活字の世界で悲劇的な事故が続発しているんだ。だから、ここらでもう一度、活字の世界の恐ろしさを再確認してもらおうと思っとな」

吉田 「ふーん。……で、どんな事故があったんだ」

吉原 「そうだな、……例えばこれ」

玉子^{たまご}さん、僕は永遠に君を愛するよ

吉原 「これは、とある恋愛小説のラストシーンで、主人公が恋人に言おうとした台詞だ」

吉田 「……ふーん。きっと、ロマンチックな作品だったんだろうな」

吉原 「ああ。そして、ものすごく感動的な小説だった。………つく……思い出しただけで泣けてくる」

吉田 「そんなにいい小説だったのか……」

吉原 「ああ。………しかし、ラストのこのシーンで、黄身………じゃなくて、身も凍るような恐ろしい事故が起きてしまったんだ」

玉子さん、僕は永遠に君を愛するよ。

・
・

・ ・ ・
玉子さん、僕は永遠に黄身をアイスするよ。

吉原 「これぞ、まさに悲劇！ 熱々（あつあつ）だったシーンが、一瞬にして凍り付いてしまった！」

吉田 「こんな馬鹿な間違いをする奴いねえだろ！！」

吉原 「……………」

吉田 「お前以外にな」

吉原 「……………えー、ゴホン。さて、それでは、次の例文を見てみよっ」

綺麗なお姉さん 「ねえ、吉田さん。今日は合コンし・た・い
」？」

吉田 「うん、もちろん」

吉田 「勝手にひとを登場させるなよ！」

吉原 「まあ、いいじゃないか。綺麗なお姉さんが誘ってくれてる
んだし」

吉田 「……………そりゃあまあ、そうだけど」

吉原 「じらやましい奴め！ じのっ！ じのっ！」

吉田 「やめろって」

吉原 「……………さて、一見すると非現実的に見えるこのシチュエーションだが、ひとつ間違うと、ものすごく現実的なシチュエーションに様変わりしてしまうんだ」

綺麗なお兄さん 「ねえ、吉田さん、今日は合コン…死体？」

吉田 「うん、もちろん」

吉田 「これの、どこが現実的なシチュエーションなんだよ!!…どこが!!」

吉原 「お前…:…いつも、オカマさん達と一緒に合コンしてるって言ってたじゃないか」

吉田 「そんなこと一言も言ってねえ!!」

吉原 「しかも、墓場で」

吉田 「誤解を生むようなことばっか言つな!」

吉原 「わるい、わるい。……さて、それじゃあ次は、いよいよ最期の例文だ」

吉田 「最後だろ。何度も間違えるなよ」

吉原 「はい、吉田、これ持って」

吉田 「なんだよこれ……バット?」

吉原 「そう、そして俺は、このグローブとボール」

吉田 「……何するつもりだよ」

吉原 「いいから、いいから」

九回裏ツーアウトランナー満塁

実況 「さあ、ここでバッターボックスに立つのは、四番の吉田！」

解説者 「今日一番の見せ場ですね」

実況 「カウント2 - 2からピッチャーの吉原、第五球を……投げました！」

解説者 「あつ！ これはかなり危ない球ですよ！」

実況 「ああー！ 吉田、三振だー！ 吉田、三振だー！ ピッチャーの吉原、見事に討ち取りました！」

吉田 「……………」

吉原 「どうした？ 顔色が悪いぞ」

吉田 「……………あつ、俺、ちょっと急用を思い出した。今日はこれで失礼するわ」

吉原 「そうはいかん、最後まで付き合ってもらっぞ。…………ピッチヤーの吉原、振りかぶって第六球を……」

吉田 「わあー！ やめろー！」

吉原 「投げましたー！」

解説者 「あつ！ これはかなり危ない球ですよ！」

実況 「ああー！ 吉田さん死んだー！ 吉田さん死んだー！ ピ
ツチャーの吉原、見事に討ち取りました！」

吉原 「……このように、ちょっとしたミスで、俺達活字の世界の
住人は簡単に死んでしまうんだ。文章を書くときはくれぐれも注意
してくれ。……えっ？ 吉田はどうしたって？ 心配ご無用！」

吉田さんは復活した。

吉田 「人を玩具おもちゃにするんじゃないねえー！！」

第九話：本当は怖い株式投資

吉原 「皆さん、こんにちは。吉原です。……さて、さっそくですが、みなさんは株式投資というものに対して、どういうイメージをお持ちでしょうか？」

吉田 「な、なんだよ。……いきなり」

吉原 「賭博^{とばく}? ギャンブル? 博打?

吉田 「全部同じ意味だぞ、それ」

吉原 「このようなイメージをお持ちの方は、ぜひとも、今回の漫才をご覧になってください。きっと、株式投資に対するイメージがガラッと変わるでしょう」

吉田 「……あれ? 今回のタイトルは、“本当は怖い株式投資”じゃなかったのかよ」

吉原 「……………吉田さん、少し静かにしてないと、また死にますよ」

吉田 「……………」

吉原 「とうわけで、……………えー、株式投資がしてみたいとお思いの皆様！ ぜひと、吉原証券をご利用ください！ ただいまキャンペーンにつき、株式委託手数料が約定代金の100%と大変お得になっております！」

吉田 「完璧に詐欺じゃねえか!!」

吉原 「はい。というわけで、今回のテーマは株だ」

吉田 「……株……ねえ。……そういえば、株の取引で一日に何百万ものお金を稼ぐデイトレーダーと呼ばれる人達が、よく話題になってるよな」

吉原 「そうだな。そして、一日中トイレに引きこもっている、デイトレーダーと呼ばれる人達も話題になってるよな」

吉田 「そんなの知らねえよ！」

吉原 「社会問題になってるだろ」

吉田 「嘘つけ！……まあとにかく、デイトレーダーを一躍有名にしたのは、なんといってもあのジェイコム株の誤発注事件だな。あの事件で一日に二十億も儲けたジェイコム男ってのは、本当にすごいよな」

吉原 「ジェイコム男か……フフフフ」

吉田 「なんだよ」

吉原 「お前は知らないんだな。相場の世界にいる、もっとすごい男達を」

吉田 「お前は知っているのかよ」

吉原 「もちろん」

吉田 「……誰だよ、それは」

吉原 「……まずは、2001年のソーショックのときに空売りかいつという手法で大儲けしたソー男こと、N氏だ！」

吉田 「ふーん」

吉原 「そして、2000年のITバブルのときに一躍時の人とな

った、ソフトパンク男こと、「J氏！」

吉田 「……あっそう」

吉原 「さらに、鉄道会社の株しか取引しないという、電車男こと、H氏！」

吉田 「何でもかんでも“男”を付けりゃあいいつてもんじゃないだろ！」

吉原 「J氏は別名、予想ガイとも呼ばれてるぞ」

吉田 「同じようなもんだろ！」

吉原 「そのツッコミは、予想ガイデス」

吉田 「もうやめろ！………まったく………せっかく今日は真面目なテーマなんだから、もっと真面目な、為になる話をしようと思っただのに………」

吉原 「為になる話か……よし、わかった！ じゃあここからは為になる話をしよう」

吉田 「……本当に？」

吉原 「うん、本当に本当」

吉田 「じゃあ訊くけどさ、……この前、世界中の株価を大暴落させた“サブプライムローンショック”ってのがあっただろ。あれって一体、何なんだ？」

吉原 「むむ、……サブプライムローンショックか。このサブプライムローン問題というのは一言で言うと、非常に複雑で、難しく、微妙ーな問題だ」

吉田 「……知らねえだけだろ」

吉原 「バカなことを言うな！ 我輩の辞書には“知らない”などという文字はない！」

吉田 「“知ったかぶる”という文字も載ってなさそうだな」

吉原 「うるさい！ いいか、サブプライムローンショックとはつまりだな、…………… サブちゃんがプライムローンを使ったことよって起きたショック安だ！」

吉田 「サブちゃんが？ プライムローンを使った？…………… どういうことだ？」

吉原 「つまりだな、アメリカに住んでいるサブちゃんが、家を買うときに優良顧客向けのプライムローン（おひょうごころん）というのを使ってしまったんだ。だから、世界中の人がパニックになってしまったんだよ」

吉田 「…………… なんでサブちゃんが、そのプライムローンってのを使うと、皆がパニックになるんだよ？」

吉原 「お前は…………… 本当になんにも知らないんだな…。いいか、サブちゃんってのはな、貧乏なことで世界にその名を知られる、超有名人なんだぞ」

吉田 「貧乏なことと有名？」

吉原 「そう。別名、ザ、キングオブプアーとも呼ばれている」

吉田 「だから、なんでその貧乏人のサブちゃんがプライムローンで家を買つと、皆がパニックになるんだよ！」

吉原 「……こんな話がある。……かつてアメリカのジョセフ・ケネディー（ケネディー元大統領の父親）は、靴磨きの少年までもが株の話をしているのに驚き、自分の持ち株を全て売却した。そして、ケネディーはその後の株価の大暴落をまぬがれたんだ」

吉田 「……………」

吉原 「つまり、サブちゃんが家を買つたというニュースで、みんながバブルに気がついちゃったというわけ」

吉田 「なんか……………無茶苦茶な説明だけど、少し説得力がある気がしてくるのはなぜだろう？」

吉原 「……………まあ、このように金融の世界は魑魅魍魎ちみせうりょうとした恐ろしい世界なんだ。特に、株で大儲けしようとたくらんでるような奴に

は要注意だぞ！ 奴らは平気で人を騙たしたり欺あいたりするからな」

吉田 「それは、お前のことだろ！！」

最終回：Gの悲劇 最臭章

吉田 「Gの悲劇最臭章？……って字が違っじゃねえかよ！ 何だよ最臭章って！ 最終章だろ！」

吉原 「まあ、まあ。細かいことは気にせずに」

吉田 「せっかくの最終回なのに、こんなんでもいいのかよ……」

吉原 「ふっふっふ。心配することはないぞ。今回のGの悲劇は、この超変態作ちようへんたいさくの最終回にふさわしい、すんごい話だ」

吉田 「それを言うなら長編大作だろ！ お前は…自分で言ってる悲しくならねえか？」

吉原 「と、とにかく！ 今回の話はなんと、密室殺人だ！」

吉田 「……密室殺人？」

吉原 「そうだ。完全な密室状態の中で発見された被害者が、いかにして殺害されたのか、ぜひ推理してみてくださいませ」

吉田 「むむ、今度こそ本当の殺人事件か。……よし分かった！
今回こそは、俺が事件を解決してやる。それで、どんな事件だったんだ」

吉原 「うむ。……今回の事件の被害者は吉村さんという人で、内側から鍵の掛かったアパートの一室で遺体で発見されたんだ。さらに、一つしかない部屋の鍵は、被害者のポケットの中だった」

吉田 「それは、……たしかに完璧な密室状態だな」

吉原 「そう。さらに、外側からトリックを使って鍵をかけることも不可能だったと言っておこう」

吉田 「うーむ。……部屋の外側からのトリックじゃないとしたら……内側から何らかの方法で自動的に鍵が掛けるトリックか……？
だとすると部屋に何か残っているはずだ。……その部屋には何か手がかりのようなものは残ってなかったのか？」

吉原 「手がかり、と言って良いかは分からないが、その部屋には芳香剤が一つあったぞ」

吉田 「……芳香剤？……何かの匂いをカモフラージュするために犯人が置いたものか……」

吉原 「さあ、どうだろう」

吉田 「他には、何か無かったのか？」

吉原 「そうだな、……そういえば、もう一つだけ。その部屋にはトイレットペーパーもあった」

吉田 「芳香剤とトイレットペーパーか。……うーむ。……」

……ああ！ だめだ！ どう考えても部屋に鍵をか
けるようなトリックは思い浮かばねえや」

吉原 「ふっふっふ。言っただろう。今回の事件は、“完全な密室
状態”の中で起きた殺人だって。それはつまり、“いかなるトリッ
クも使えない”ということだ」

吉田 「完全な密室……か。……それじゃあ、別の方向から調べてみ
るしかないな。……その吉村さんって人の死因は何だったんだ
？」

吉原 「死因は、出血性のショック死だ」

吉田 「出血性ショック死………それで、外傷はどこにあったん
だ？」

吉原 「そ、それは………」

吉田 「それは？」

吉原 「……く、口ではとても言えない所だ」

吉田 「……………」

吉原 「……………」

吉田 「……あ、あのさあ、——訊いてもいいかな？」

吉原 「……何だ？」

吉田 「今回の話は確か、殺人事件……だったよな？」

吉原 「殺人事件？ いや、違う」

吉田 「違うって……お前が自分で密室殺人だって言ったんじゃないかねか！」

吉原 「殺人は殺人でも、今回の話は“殺人痔^ぢ件”だ！」

吉田 (・〇・)

ぢーの悲劇 完

吉田 「最後の最後で、こんなシモネタかよ！」

吉原 「これでいいのだ」

最終回：Gの悲劇 最臭章（後書き）

最終話までお付き合いいただき、ありがとうございました！ 少しでも笑ってもらえたなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4380g/>

笑いの大学院

2011年1月9日02時41分発行